

---

# ひと夏の恋（笑いアリ）

伊之口浩作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひと夏の恋（笑いアリ）

### 【Nコード】

N2201A

### 【作者名】

伊之口浩作

### 【あらすじ】

バスケ部が夏休みを利用して海へ。そこで繰り広げられる、甘く儚い恋のお話し。傑作との呼び声高い、風画シリーズ第二弾！！あくまでも、これはコメディ小説です。

## 第一話 海へ！（前書き）

前書きとあとがきを使って、キャラクター紹介をします。

はくろふうが  
白狼風画 男 身長：198センチ

体重：108キロ

バスケット部のキャプテンを

務める高校二年生。スポーツ万能で成績優秀、ワイルド系のイケメンで、かなり明るい性格。絵に描いたような、リーダータイプなので、男女を問わず人気である。美奈の彼氏。

## 第一話 海へ！

「何故、姉さんを殺したー？」

夏休み中の教室に響き渡る怒声。

声の主は包丁を手にしており、今にも刺し殺す勢いである。

「うあああああ！　姉さんの仇だああ！」

男は包丁を腰ために構えて、目の前の相手に突っ込んだ。

「ぐぶっ」

刺された男は血を吐きよろめく。

「畜生！　お前を殺しても、姉さんは帰って来ないんだー！」

刺した男は、返り血を浴びる中、意味のない復讐を悔いた。

そのおり、刺された男は薄れ行く意識の中で立ち上がり、最期の言葉を放った。

「君の姉さんは死んでいない」

「えっ！」

余りに突然の告白に、刺した男は包丁を落とした。

「嘘だ！　俺は姉さんがお前に崖から突き落とされるところを見た  
！」

「僕は、君と、本当の勝負がしたただけなんだ。これからは、  
姉弟仲良く暮らすといい……」

刺された男はそう言って事切れた。

ガラガラガラガラ。無機質とは言わないまでも、どこことなく愛想  
のない教室のドアが開く音。

「こーんにーちは！」

教室に一人の女が入ってきた。

「ね、姉さん」

刺した男は女を見た。

「え？　どうしたの」

戸惑いを隠せない女。

その直後、大柄の男が割って入る。

「あー、何が『ね、姉さん』だ。妙なアドリブ入れんなよ」

刺した男の戸惑った口調のモノマネをしつつ、大柄の男は彼の頭の平手で叩く。

「風画クン。何やってんの？ またあの続き？」

混乱してる読者がいるといけないので、ここで諸々の説明をすることにする。

大柄の男は白狼風画といい、公立高校の生徒である。続いて刺した男は飯島進矢といい、風画とは同級生である。次に刺された男は藤樹槍牙といい、風画とは幼稚園からの仲である。最後に、教室に入ってきた女は河合美奈といい、風画の彼女である。ちなみに、美奈の言った『あの続き』が気になる方は、『シネマ七日間地獄』の閲覧を推奨します。

閑話休題。

「まあね。暇だったからさ」

風画はさらりと答えた。

「そうなんだ」

美奈は風画と同じように、さらりと返した。

「でも。ちゃんと後片付けしないとダメだよ」

美奈に言われて、風画は後ろを振り返る。

見ると、血の代わりに使った絵の具が至る所に撒き散らされていた。

「まあ、その辺は気にするな」

風画はそう言って、美奈の肩に手を置いた。

「で、どうかしたの？」

風画は美奈に訊いた。美奈はすぐさま答えた。

「あつ、うん。女バスのみんながね、『今度、男バスと一緒にどこか行かない』って話になってね、それについて聞きに来たの」

ここにいる四名は全員バスケット部である。

「ああそう。どこにする？」

風画は首だけ振り返り、進矢と槍牙に訊いてみた。

「俺は別にどこでも良いが」

槍牙は持ち前の渋く深みのある声で言った。

「俺も。そういうことは風画に任す」

進矢は無責任に言った。

しばし、室内を支配する沈黙。思案する風画。

そのおり、風画の携帯が鳴った。

「おつ。ちよつとごめんね」

風画はそう言って一同に一礼すると、足早に教室を後にした。

「あれ。兄貴からだ」

風画の携帯には、風画の兄の名が表示されていた。

「もしもし」

風画は廊下で電話に応じる。

『よお。てめえの兄貴様だ。久しぶりだな、風画』

携帯電話から発せられる声の主こそ、風画の兄・白狼海雅のものだった。

「おう。どうしたんだよ、正月にも帰らないで」

『悪い悪い。サークルの付き合いでちよつとな』

「サークル？ 何のサークル」

『ああ。旅行系のサークルでよ、正月は真冬の海に行ってた』

「あつそ。で、何の用？」

『ああ忘れてた。次の日曜に家に帰ろうと思ってんだけど、いいよな？』

「好きにしな」

『ん。じゃな。我が親愛なる弟よ』

風画の兄は、わざとらしい口調で電話を切る。

風画は電話をしまうと、またもや足早に駆け出して教室へと向かう。

教室では、行き先をどうするかという議論が侃々諤々と繰り広げられていた。

「軽井沢とかどう？ 涼しくていいよ」

「涼しいだけだろ。却下」

「進矢はいつも却下してばかりだな。たまには意見を出したらどうだ」

「えーと……」

槍牙に指摘されて口籠もる進矢。

「！」

どうしようかと混迷する進矢は、教室に入ってきた風画に気付いた。

「俺は風画と同じ」

進矢は巧みに逃げた。

「風画。どこがいい？」

槍牙にそれを咎められる前に、進矢が風画に訊いた。

風画は一瞬戸惑ったが、すぐさま口を開いた。

「うーん……。海行かない？」

風画がそう言った理由は単純である。ついさっき、『海』という単語を耳にしたからである。

二秒間の沈黙の後、その意見は採択された。

## 第一話 海へ！（後書き）

藤樹槍牙 ふじきそうが 男 身長：186センチ 体重：89キロ バスケ部の副キャプテンで、風画の幼なじみであり、ライバルでもある。眼鏡を掛けたオールバックが特徴で、私服を着ると、レイバンのサングラスを掛ける。深く渋みのある声が大人びた雰囲気醸し出し、言動も渋くてクール。蘊蓄に明るく漢字にも詳しい。意外に優しい性格の持ち主。コーヒーと動物好き。



## 第二話 sailing day ～出航の日～（前書き）

河合美奈 かわいみな 女 身長：178センチ 体重：68キロ 女子バス  
ケ部のキャプテンの高校二年生。スポーツ万能、成績優秀、容姿端  
麗という三拍子揃った人。その上性格も良く、周囲の男の魅了し  
て止まないが、彼氏が風画なので、すり寄ってくる男は少ない。カ  
ワイイ系の美女。大好物は馬刺。

## 第二話 sailing day ～出航の日～

部活の無いある日。風画達は電車で一時間半の海岸に来ていた。

男性陣は、風画、槍牙、進矢の三名。女性陣は美奈、女バス二年の高木祐美、別の高校に通う槍牙の彼女の滝川沙輝の三名である。

一行はとりあえず、パラソルの設営を始めた。風画と槍牙が持参したパラソルを、六人で協力しながら、さながら青春ムービーみたいに仲むつまじく設営する。

程なくしてパラソルは設営され、一行はとりあえずくつろぐことにした。

「ふいい。じゃあ、着替えるか」

と、進矢が切り出した。

「そだね。じゃあ、着替えよう」

復唱するようにして、風画が言った。

風画の一言に従うようにして、男性陣が服を脱ぎ始める。服の下に水着を着用済みなので、特に問題はない。

「私たちは向こうで着替えてくるね」

美奈はそう言って、海の家無料更衣室を指差す。男性陣は既に上半身裸の状態だったが、女性陣は特に驚いた様子は無く、風画が『うん、分かった』と言うと、軽く手を振ってその場を後にした。女性陣の後ろ姿を見届けたところで、進矢が口を開いた。

「俺さ、あの髪の毛長い子がいいと思うんだけど」

髪の毛の長い子とは、沙輝のことである。進矢は、沙輝が槍牙の彼女であることを知らない。

風画はその事実を知りつつ、進矢を少し泳がすことにした。

「じゃあ、最初からガンガン行っちゃおう？」

風画の目は完全に悪役の目だった。しかし、皮肉にも進矢はそれに気付いていない。

「いっちゃうしかないんじゃない？」

風画に乗せられ、やる気満点な進矢。  
そんな進矢に、槍牙が横槍を入れる。

「あまり、妙なことをしたら、そのときは覚悟しておけ」

深く渋みのある声で槍牙が言った。それこそ、任侠映画さながらのドスの利いた口調であつた。

「えっ。どういう意味？」

進矢はうかれ気味の笑顔のまま硬直し、槍牙の方を見た。  
直後、風画が吹き出す。

「ぶわーはっはっは！ 槍牙ちゃん、それ言っちゃダメでしょー」  
涙目で笑い転げる風画。彼の笑い声は、人気のない砂浜で虚しく響く。

「えっ。だから何？」

進矢は天性の鈍感らしい。

「わっかんないかなあ。つまりね、髪の高い子は」  
そこで風画は黙る。

「……の」

風画は『そうが』と口パクで言うてから、槍牙を指差した。

「……」

丁度良い間を設けてから、小指を立てる。

「わかったあ？」

意地悪なにんまりとした笑みを浮かべる。

「う、嘘だあああ」

五秒間のエコー。

海でどれだけ声を出しても、空気振動を跳ね返す物が無いので、これは心理的な描写である。ちなみに、進矢の嘆き声は着替え中の女性陣の耳にも届いた（妙な想像力を働かせた君。減点です）。

「まあ、でも。高木ちゃんも結構可愛いよ」

風画は詫びる様に慰める。

進矢はうなだれながら、力無く答えた。

「いや。実は。高木にはもう告った」



進矢は一人で盛り上がり、海に向かって雄叫びを上げた。

「ねえ。何が気合いなの？」

見ると、女性陣が着替えを済ませて勢揃いしていた（誰がどんな水着を着てるかは、皆さんのご想像にお任せします）。

「あいつは今、『恋』という大海原に、自分の舟を浮かべたんだ」

槍牙がさらりと、気の利いた文句を放つ。実際、気が利いていたかどうかは曖昧な線引きだったが、それでも槍牙は満足げだった。

進矢はこのときも、海原に向かって吼え続けていた。

## 第二話 sailing day ～出航の日～（後書き）

飯島進矢 いいじましんや

男 身長：180センチ 体重：74キロ

バスケット部の二年生でスタメン。顔も良く、バスケの腕もなかなかのもので割と明るい性格なのだが、頭の悪さといい加減な性格が災いして彼女がいない。典型的な部活人間。

### 第三話 カミングアウト×当事者×蚊帳の外（前書き）

高木<sup>たかぎ</sup>祐美<sup>ゆみ</sup> 女 身長：164センチ 体重：55キロ 女子バス  
ケ部の副キャプテン。中の上くらいのルックスで、それなりにモテ  
る。

### 第三話 カミングアウト×当事者×蚊帳の外

着替えを済ました一行は、各々の準備を始めた。女性陣は、自ら持参した浮き輪などを鞆のなかから取り出す。

風画はそれを見逃さなかった。すかさず、進矢の肩に手を掛けて耳打ちする。

「進矢。ここだ。ここで高木ちゃんに良いところを見せろ」

他のメンバーに背を向けた恰好で言った。

「上手くやれ！」

風画は進矢の胸を左の拳で叩いた。

「お、おう」

突然の一発に怯みながらも、進矢は力強く返した。

進矢は勇み足で祐美に近づいた。

「て、手伝おうか？」

緊張のせいかな、進矢は少しかんだ。

しかし、祐美はそれをさして気には留めなかった。

「え、やってくれるの？ ありがとう」

笑顔で浮き輪を差し出す祐美。

何かと訳ありなので、進矢は祐美の笑顔を直視できなかった。

（やっぱ、かわいい……）

進矢は心の中で呟きながら、浮き輪を一生懸命に膨らませる。

「いいか、みんなよく聴け」

浮き輪を膨らます進矢と、それを見守る祐美と距離を取る形で、風画が切り出した。

「進矢の恋を成就させてやりたい。頼む、協力してくれ」

風画は顔の正面で両手を合わせ、深々と頭を下げた。

「あのさあ……。ちよっといいかな……？」



そのおり、美奈が申し訳なさそうに口を開いた。

「私からもあるんだけど。実はね、進矢クンが祐美に告ったこと、知ってるんだ」

美奈が言うにはこうだった。

祐美が進矢に告白されたとき、祐美はどう答えて良いかわからず、とっさの判断で進矢の申し出を断ってしまったのである。祐美は進矢と付き合うことに何ら抵抗は無く、むしろ、進矢の気持ちを棒に振った事に対して後悔しているらしい。機会があれば謝りたいのだが、気まずくて中切り出せないらしい。

ちなみに、今回の遠出は進矢に謝りたいと思っている祐美の発案で、本当の主催者は祐美である。

「なるほど、そういうことか」

美奈の話を聴き終えたところで、槍牙が言った。

「そうなの。そういうことなの。だから、私からもお願い、祐美に協力してあげて。あの娘、結構内気なところがあるから……」

美奈は口籠もった。

そのおり、風画が口を開く。

「よし、わかった。つまり、俺たちが協力して、二人の仲を取り持つてやれば良いんだな」

「うん、そう」

美奈は即答した。

「じゃあ、みんな。二人の恋を成就させっぞ！」

『おおー！』

一同は掛け声と共に、右腕を空高く突き出した。

祐美はその掛け声を自分のための掛け声だと解釈し、心の中で感激した。

（ごめんね。みんなありがとう）

進矢は浮き輪を膨らますことに必死になり、掛け声はおろか、頬を膨らました真っ赤な顔の自分にすら気付いていなかった。

### 第三話 カミングアウト×当事者×蚊帳の外（後書き）

滝川沙輝<sup>たきがわさき</sup>

女 身長：168センチ 体重：59キロ ロングヘア

ーと低音のハスキーボイスが特徴。かなり大人びた外見と性格の持ち主。槍牙とは似た者同士なので、かなり仲の良いカップルである。

## 第四話 男らしさ其の壱（前書き）

はくろつかいが  
白狼海雅

身長：184センチ 体重：80キロ

風画の兄。性格は風画に似て快活。風画と違う点は、リーダーシップがないこと。現在、大学4年生。

#### 第四話 男らしさ其の壱

風画たちは、どうすれば良いかとあれこれ思案していた。

風画と槍牙がヤンキーに扮して祐美に絡み、それを進矢が追い払い、二人が逃げ出したところで告白、といった定番のシナリオが案として浮上したが、美奈と沙輝の猛反対を受け、敢えなく却下された。

ほかにも色々な案がでたが、やれ『ロマンティックじゃない』とか『普通過ぎる』等と批判された。

結局、四人が出した結論は、『二人に任せる』だった。

さて、今度は『どうやって、二人に任せられるか』という議論になったが、『二人つきりにさせる』という意見で決着した。

「チツ。せつかく乗り気だったのに。これじゃあ全然面白くない！」腰まで水に浸かり、美奈の入る浮き輪を押しながら、風画は舌打ちして愚痴った。

「でも、いいじゃん。結局、私たちも二人つきりになれたんだし」

「まあ、確かにそうだな」

風画はそう言つと、いきなり、かなり激しいバタフライを始めた。

「ふふ。一番喜んではるのは風画くんじゃん」

美奈は笑顔で呟いた。

沙輝は海面を見詰めていた。

彼女が今いるところは、海水浴場の遊泳エリアギリギリのところだった。少し先には、波消しブロックが積まれている。

何故、そんなところにいるかというと、槍牙に連れてこられたのである。槍牙は沙輝に、「ここで待っててね」と言い残して海に潜った。

しかし、槍牙が潜ってから早二分弱。彼が上がってくる様子はない。

「大丈夫かな？」

沙輝が槍牙の身を案じていると、沙輝の視界に謎の管が現れた。  
「何あれ？」

沙輝が疑問に思った瞬間、管から水が噴き出した。

「えっ!？」

沙輝は突如現れ水を噴き出す管に恐怖さえ覚えた。

が、その恐怖は次第に消え、いつしか安堵に姿を変えていた。

「遅くなった」

謎の管は、槍牙のシュノーケルだった。彼は両目が繋がったタイプの水中メガネにシュノーケル、上半身のみウェットスーツに軍手、足ヒレに先がくの字型の金属製の工具、といったいでたちだった。

「見る。近海物の天然サザエだ」

槍牙は自慢気に手にした網袋の中を見せる。中には拳大ほどのサザエが五、六個収まっていた。

「どうしたの？ これ？」

沙輝は目を丸くして訊いた。

「あそこのテトラポットのところから捕ってきた」

槍牙は得意気に言い、波消しブロックの山を指差す。

「良いの？ こんなことして？」

通常、海水浴場の入り口などには、『海産物の採取禁止』といった旨の看板が立ててあり、ここも例外では無かった。

しかし、槍牙に悪びれる様子は無く、むしろ、当たり前前の事のように言った。

「見つからなければ大丈夫さ。それよりも、もうちょい深い所にアワビがいる。七輪と味噌と塩を持ってきたから、後で捕れたてを食べよう」

槍牙はそう言うと水中メガネを掛け直し、再び、海中へと姿を消した。

「槍クンで……、もしかして海人？<sup>うみんちゅ</sup>」

沙輝は槍牙が消えた場所をじっと見詰めながら、小さくこぼした。

ビーチで祐美と二人きりになった進矢は、自分の胸の高鳴りを感じていた。

進矢の瞳は「前は振られたけど、祐美の事は諦められない」と言っている様だった。

（このままじゃダメだ。俺が動かないと）

進矢は覚悟を決めて祐美を誘おうとした。

しかし、進矢が口を開こうとした直前に、祐美が進矢の肩を叩く。

「ねえ、あそこにいる人追い払ってよ。何か怪しくて……」

祐美はそう言って海とは反対の方向を指差した。

進矢がその方向に目をやると、明らかに怪しい男がたたずんでいる。

「ああ。何だありゃ？」

男は痩せ型の体型でリュックを背負い、手にはビデオカメラらしき物を持っている。海だというのに、明らかに怪しい。

「ね。怪しいでしょ」

進矢は確信した。あれは『盗撮犯』だと。祐美に良いところを見せたい一心の進矢は、迷わず立ち上がった。

「オイ。てめえ何してんだ！」

進矢は強気だった。両者の優劣は火を見るより明らかだ。

「いや、あの……。僕は別に……。何も……」

男は進矢の気迫に押され、かなりおどおどしていた。

「うるせえ！ さっさと失せろ！」

進矢はそう言って、男の肩を押した。

「うわあ！」

進矢はあまり強く押したつもりでは無かったのだが、男がひ弱なのか、怯えていたかのどちらかだろう。男はその場に尻餅をつく。

「そ、そんなつもりじゃないのにiiiiiiii！」

尻餅の直後、男は猛ダッシュしてその場を去った。

後で分かった話だが、カメラの男は映研部の部員で、その日は、  
純粹に海を撮りに来たらしい。ちなみに、男のあだ名は『ペンキ男』  
というらしい。

何はともあれ、進矢は男らしさをアピールできたのである。

## 第五話 男らしさ其の式（前書き）

なんだかんだ言っで、この進矢という男、かなり恵まれてますね。



## 第五話 男らしさ其の貳

進矢が裕美の所に戻ると、そこには既に風画と美奈がいた。

進矢は裕美の肩を叩き、

「追っ払って来たよ」

「うん、ありがとう」

裕美は振り返って言った。

そのやり取りを耳にした風画は、進矢を脇に抱えて皆と少し離れる。

「進矢。俺のいない間に何があった？」

「盗撮野郎が出てさ。俺が追っ払ったんだ」

「マジ！？ よくやった。これは高得点だ」

そのおり、裕美の話し声が二人の耳に入った。

「ねえ、美奈。お腹すかない？」

風画は即座に反応し、すぐさま、進矢に耳打ちする。

「進矢、良く聴け。これから高木ちゃんをメシに誘え。そして、沢山話せ。勿論、メシ代はお前持ちだ。いいな！？」

風画はそう言って、進矢の肩を強く叩いた。

「おう。わかった！」

進矢は力強く答えた。

進矢は裕美と一緒に、海の家テーブル席に座っていた。彼の誘いはタイムリーヒットし、見事、二人つきりでの食事にこぎつけたのである。ちなみに、進矢はカレーを頼み、裕美は冷やし中華を頼んだ。

「空いててよかった」

進矢の言った通り、店内は空いており、空席も目立つ。

「まだお昼前だもんね」

時刻は十一時半を回ったばかりだった。

店内が空いているせいか、注文の品はすぐ届いた。

「カレーと冷やし中華になります」

バイトと思しき店員が、二人の所に料理を運んできた。

「いただきまーす」

最初に料理に箸を付けたのは裕美だった。

進矢はそこで初めて気付いた。自分が知らず知らずのうちに、裕美に見入っていることを。

「食べないの？」

なかなかカレーに手を出さない進矢を気遣ってか、裕美は進矢に声を掛ける。

「おおっ！ いや、食べるよ。ははは」

進矢は笑って誤魔化すが、結局、カレーには手を出さない。

「はは……。それ、おいしい？」

進矢は裕美に訊いた。どうやら、風画の指示が頭から離れていないようだ。

「うん。おいしいよ」

裕美は一回だけ進矢を見た。

（ちくしょう。会話が続かない）

進矢は心の中で悲観した。元々、明るい性格なのだが、意中の相手の前ではそうはいかないようだ。

そのおり、裕美の箸が止まる。

「ん。どうした？」

裕美の一挙手一投足に全神経を注いでいた進矢は、裕美の異変を見逃さなかった。彼女はこわばった表情のまま、冷やし中華の皿を進矢に差し出す。

「どうしたの？」

進矢は疑問を抱きつつも、冷やし中華の皿に目をやった。すると、冷やし中華の麺に隠れるようにして、一匹のフナムシが潜んでいた。「のわっ。なんじゃこりゃ！」

進矢は驚いた拍子に、膝のテーブルにぶつける。すると、潜んで

いたフナムシは息を吹き返し、麺を押しつけるようにして、その場から逃げ去って行った。

「高木ちゃん。大丈夫？」

進矢は裕美の身を案じて訊く。

「うん。大丈夫……」

裕美はこくりと頷いた。

そのときだった。進矢の脳内で天才的なアイデアが湧いたのは。

「高木ちゃん。俺のカレー食べなよ」

浜辺では、槍牙の獲って来たサザエとアワビの浜焼きが、槍牙の手によって振る舞われていた。

ちなみに、フナムシのせいで昼飯を逃した進矢は、余ったサザエを美味しく頂いた。この話は、進矢と槍牙だけの秘密である。

## 第五話 男らしさ其の貳（後書き）

海と言えば、フナムシしかないでしょう！

## 第六話 回って 回って 回って 回る（前書き）

そろそろ佳境に入って参ります。

## 第六話 回って 回って 回って 回る

盗撮魔の撃退。自分の食事の譲渡。この二つのお陰で、裕美の進矢に対する好感度は大幅にアップした。ここまで男らしさをアピール出来れば、後は告白するのみである。進矢と裕美の恋の成就是、最終ステージへと駒を進めた。

今の二人に必要な物は、完全な二人っきりの時間のみである。

今日、風画達の訪れた海岸は、日曜日と言うこともあって人気が多い。これでは、二人つきりもへったくれもあったものではない。四人に課せられた使命は、いかに二人つきりにするかだ。

「俺としては、夕方になってから、二人があ岬に行くようにし向けるつもりが良いと思う」

パラソルの影の中で風画が言った。

「いや、待て。最初に『二人に任せる』という意見で決まっただけでは？」

折り畳みチェアで仰向けになり、体を焼いていた槍牙が言った。

「夕方になって夕日が出たら、きつと告白出来るよ」

沙輝はパラソルの中でリングを剥きながら言った。

「きゃあー。それすごくロマンチックうー」

美奈は感激のあまり、沙輝に抱きついた。

「槍クンがね、みんなでスキー行った時に、そうやって告白してくれたんだ。ね、槍クン」

沙輝はそう言って、日焼け中の槍牙を見た。

槍牙は沙輝に見られた瞬間にサングラスをかけ直し、気付いていない振りをした。

「何照れてんだよ！」

風画が槍牙を引っぱたく。

「痛っ！」

胸板に風画の張り手を喰らった槍牙は、一瞬縮み上がりその拍子

に折り畳みチエアから転げ落ちた。

「ぶごっ！」

槍牙は体の正面から砂地に突っこむ。

槍牙がビーチと正面衝突していたとき、裕美と進矢は、貸しボートで沖に出ていた。

進矢はボートをこぎながら、あれこれと思案していた。

（ボートに乗ってんだから、告るなら今だよなあ……。でもなあ、物事にはタイミングってモンが……）

進矢は一人ぶつぶつ言いながらボートをこぐ。そのおり、進矢の耳に裕美の声が入った。

「ねえ、飯島クン。ぐるぐる回っちゃってる……」

進矢は我に返った。彼は考え事に夢中になりすぎるあまりに、片方のオールしか動かしていなかったのである。

「ああ、ごめんね」

進矢は裕美に謝ってから、動かしていなかった方のオールを動かした。

「ねえ、今度は反対側に回ってるよ……」

進矢は完全に自分を見失っていた。

「ははは。ごめんね」

進矢はそう言っ、オールから手を離す。

「飯島クン。今日は何か変だね。大丈夫？」

裕美は進矢の顔を覗き込んだ。透き通った二つの瞳が、真っ直ぐに進矢の瞳をその中に映す。進矢はその瞳に魅入られたことにより、体中を駆け巡る強烈な物を感じ、メデューサに見られたかの様に硬直してしまった。

（ヤバイ。高木ちゃんに見詰められてる……）

進矢は自分の心臓が、これまでの人生経験の中で一番早く脈打っていることを痛感していた。

（どうしょ……。可愛すぎて……。ヤバイ……）

進矢は目を逸らすしか無かった。

「大丈夫？ 顔、赤いよ」

進矢はどうすることも出来ず、ただただオールを漕ぐことしか出来なかった。裕美に魅入られたことに戸惑いを感じた進矢にとって、その状況を打破出来る事はそれしかなかったのである。

「飯島クン。また回ってる」

裕美の声であれも、今度ばかりは進矢の耳には届かなかった。



## 第六話 回って 回って 回って 回る（後書き）

『ペンキ男』こと宇佐美秀二 身長：159センチ 体重：54キロ

元映研部の一年生。直哉に叱られ、そのいざこざからペンキを被り『ペンキ男』と呼ばれるようになった。今は元映研部の三人と『映画研究同好会』をやっており、彼は書記。

## 第七話 海と風のいたずら

ビーチの風画達は、恒例のビーチバレーに興じていた。風画&美奈チーム対槍牙&沙輝チームによる、時間無制限五ポイントマッチだった。

「食らええ、槍牙！ 白狼スペシャルサーブ！」

風画は渾身の力を込め、ビニール製のボールを思いきり拳で叩いた。

ボールは見る見る加速し、ぐんぐんと上昇し、槍牙のコートを飛び越えて、遙か彼方の男の顔面に激突した。

「あちゃあ！」

風画は大袈裟なりアクションをとり、ボールの当たった男に駆け寄った。

「すいませーん。大丈夫ですかあ？」

ボールをぶつけられた男に怪我はないようだったが、問題はぶつけられた男の方だった。

「うわあああああん。みんなして僕のことおおおお。もう、嫌だあああああああ！！！！！！！！！！」

男は目にも留まらぬ早さで走り去る。それこそ脱兎の如く。

「あれ、アイツ、どこかで見たことが有るような無いような……？」  
地面に転がるボールを拾いつつ、風画は小さく呟く。

「ま、いいか」

風画はそう言って、槍牙達の居る所へと戻った。

進矢は漕ぎ疲れて空を仰いでいた。

「はあ、はあ、はあ……」

心臓の鼓動はドキドキではなく、ドクンドクンに変わっていた。スポーツをした直後に感じる鼓動だった。

息を切らして俯く進矢。彼は首を持ち上げて裕美を見ようとした。

すると、裕美はボートの片方の縁にもたれるようにして寝入っていた。

「あ、あれ？ 高木ちゃん？」

進矢は裕美の肩をさすった。

「高木ちゃん。どうしたの？ 船酔い？」

進矢は尚も、裕美の肩をさする。

「ん、あ、なあに？」

裕美は目を覚ました。

「あれ、寝てただけなの」

進矢は安堵の表情を隠しきれなかった。

「あ、うん。ごめんね。心配した？」

「ん、あ、いいや。全然」

進矢は両手の手のひらを裕美に向けて両手を振り、大袈裟なりアクションをとった。

「ごめんね。実はさ、昨日のバイトでいつもより多くお客さんが来て、それでいつもより疲れちゃったの」

裕美は大きく伸びをした。

「ああ、そうなんだ。どこでバイトしてんの？」

「国道沿いのエネオスの脇を行った先にあるコンビニ。昨日はさあ、ホント大変だったんだよ。いつもだったら、一時間に十人くらいなのに、昨日は三十人くらい来てさあ。しかも、昨日はいつも入ってる女子大の人が居なくて、ずっと一人だったんだから」

「そうなんだ。ははは。お疲れさま」

二人の会話は見る見るうちに膨らみ、気付けば互いに笑い合っていた。しかし、二人はそれと同時に、もっと重要な物を見落としていたのである。

ビーチバレーも一段落し、パラソルで一息ついていた風画達は寝そべてのほほんとしていた。

「なあ、美奈。明日部活有るっけ？」

「んもう。風画クンは部長でしょ。もつとしつかりしなさいよ」

「ごめん、ごめん。槍牙あ、どうだったっけ？」

「多分、三時からだ」

「そっかあ、さんきゅ」

「ねえ、そう言えば沙輝ちゃんは？」

「あふあゝ、寝みい……」

「風画クン。聴いてる？」

「お休みいゝ」

「ああ、もう。槍クン、どこ行ったと思う？」

「さきほど、ジュースを買いに行くに行っていたが」

「あつ、そう。ふわあ……、私も寝よ。槍クンお休み」

「ん、お休み」

風画と美奈が寝入ってから少し経ってから、パラソルに沙輝が帰ってきた。

「槍クン、ただいま。はい、コーヒー」

沙輝は槍牙に缶コーヒーを差し出す。

「ありがとう」

槍牙はそう言っただけで起きあがり、大きく伸びをした。

「んゝ、くあゝ」

槍牙が気持ちよさそうに伸びをした。

そのおり、首を回していた槍牙に沙輝が話しかける。

「ねえ、槍クン。さっき、監視塔の近くの看板を見たんだけどね、

台風の影響で海流が早くなってるんだって」

「うん、それで」

槍牙は缶コーヒーを開け、中身を飲み始めた。

「それでね、裕美達大丈夫かなって……」

沙輝が言い終わると、槍牙の顔が一気に引き締まり、いつもの伶俐な風貌に戻った。

「そう言えば、進矢達のボートはどこだ」

槍牙は立ち上がり、海原を睥睨した。それらしき物はどこにもな

かった。

「ねえ、これって、もしかして……」

沙輝の声には不安が混じっていた。

「信じたくは無いが、信じざるを得ないかも知れない」  
ボートの二人の行方は、風と波だけが知っていた。

第八話 ロビンソン・クルーソーもどき（前書き）

海っていいよね。広いから  
空っていいよね。青いから  
海と空っていいよね。広くて青いから

## 第八話 ロビンソン・クルーソーもどき

ボートの上での談笑は、絶える事なく続いていた。

「そんでね、そんな時風画が叫んだんだよ『ウニ一丁!』ってね。もしたら、今度は槍牙が『はい、喜んでー!』とか言い出してさ。マジで笑えたね」

今の話題は『合宿の夜』である。

「そうなんだ。二人ともおもしろいね」

「うん、あれは笑えた。あーあ、録音しとけばよかった」

進矢は名残惜しそうに言って、伸びをしながら仰向けになった。ブツツ。

進矢は自分が仰向けになった瞬間に、何か張りつめられた物に穴が空くような音がしたのを聞いた。その音が悪魔の所業なのか、天使の恩恵なのかは、まだ誰も知らなかった。

「くそつ。まさか流されるとは……」

進矢と裕美の居なくなつたビーチで、風画は狼狽した。

「どうしよう……」

美奈は今にも泣き出しそうである。

「お願い、二人とも無事でいて」

沙輝は体の正面で手を組み目をつむる。

「迂闊だった……」

槍牙は海原を見た。高くうねる波は、まるで、進矢達を押し流したことを誇るかの様に寄せては返すを繰り返していた。

「ごめんなさい!」

進矢は裕美に頭を下げた。彼の聞いた音とは、ゴムボートの船底に穴の空いた音だった。二人が乗っていたボートは、砂場の湾から岩礁だらけの入り江に流されてしまい、浅い所にあった岩によって

船底に穴が空いてしまったのである。ボートは浸水の影響で敢え無く沈没し、二人は近くの大きな岩の上に這い上がり、そこで助けを待っているという次第である。

「本当にごめん！」

進矢は今にも土下座しそうな勢いだった。

「……」

裕美はしゃがんで両手の手のひらで顔を覆いうなだれる。怒っているのか泣いているのかさえ分からなかった。

進矢は裕美の様子を伺った。どちらともとれない様子の裕美に、進矢は謝ることしか出来ず、またもや、深く頭を下げた。

「あ、あの……」

進矢は恐る恐る口を開いた。

「あのさ……、怒ってる？」

しばしの沈黙。両者の空気がみるみる悪くなっていくのを察したかのように、裕美が口を開いた。

「別に……、怒ってる訳じゃないけど……」

裕美の声は低く、元気がなかった。

「ねえ、飯島くん。ケータイ持って……」

裕美は顔を上げて進矢を見た。進矢はバミューダパンツ一丁で、それ以外は何も着ていない。

「……る訳ないよね……」

裕美は再びうなだれた。

「高木ちゃんは？」

進矢がそう訊くと、裕美は首を横に振った。

「ここ……、どこなんだろ……」

裕美は立ち上がったて辺りを見回した。どれだけ目を凝らしても、元いた砂浜は見えず、人気のない山林が陸地側に控え、海に船らしき物はなかった。

「あの岬の向こう側かな……？」

裕美はそう言って、海に突き出た岬を指差す。



「ああ、きっとそうだろうな」

「どうする……?」

裕美は不安げに訊いた。

「……」

「……」

両者を沈黙が包む。

「まあ、きっと風画達が気付いて、すぐに助けが来るでしょ」

進矢はそう言っ、その場にどかっ、とあぐらをかい、た。

「なるようになるさ」

進矢は裕美を不安にさせたくない一心で、一生懸命に笑顔を作つて見せた。

「うん、きっとそうだよな」

進矢の笑顔を見た裕美は、自然と顔をほころばせた。

## 第九話 A f i e r y s u n s e t (前書き)

今回のサブタイトル。はつきり言って適當です。  
見せ場なのにすんませんm(><)m

## 第九話 A f i e r y s u n s e t

岩山の上の二人は、互いに海を見詰めていた。助けが来るのをじっと待っているのである。

「来ねえなあ……」

進矢は小石を海に向かって投げた。

「そつだね……」

裕美は進矢の投げた小石の行方を見た。

小石は力無く失速し、海中に消えた。

「風画達……、気付いてるよな？」

進矢は裕美に訊く。

「うん、多分気付いてると思う……」

進矢達が岩の上で風画達の助けを待っている頃、風画達は大きな問題に直面していた。

「槍牙あ！ 消防署は一一九だっけ？」

風画は携帯を手にして言った。

「風画クン、違うよ。消防署は一一〇番だつて」

美奈は風画から携帯を取り上げ、一一〇番をプッシュしようとする。

「美奈、違うよ。一一〇番は警察。ついでに海の事故は一一九じゃなくて……」

沙輝は途中まで言いかけて口籠もる。

「なんだったっけ？」

一同ずっこける。

「槍クーン。なんだったっけ？」

沙輝は槍牙に助け船を求めた。

「一一七だ」

槍牙は堂々と即答した。

「すごい。さっすが槍クン」

沙輝は早速その番号にかける。

『ピッピッポーン。只今の時刻、午後四時……』

携帯を耳に当てた状態で固まる沙輝。

「どうした？」

槍牙が沙輝に問いかける。

「今ね、四時三五分だって」

風画は槍牙を睨んだ。

「じ、時報じゃねえかあああ！」

風画は槍牙を追いかけて回す。

「違ったようだ」

「さらりとまとめんじゃねえ！」

進矢達が救出されるには、まだまだ時間が要りそうだった。

岩山の上で待つこと数時間。待てど暮らせど一向に助けの来る気配はなかった。

「はあゝあ。もう日が暮れてんじゃん。何やってんだよアイツ等は」

進矢は手で手頃なサイズの石を探したが、めばしい石は既に投げ尽くしていた。

投げれる石が無いことを知った進矢は、ふと顔を上げた。進矢の視界には、遙か先の水平線が、今にも太陽を飲み込みまんとしている情景だった。沈みかけた太陽に照らされた空間は、ほのかな朱色に染る。

「……キレイ……」

裕美はとても小さく呟いた。それほどまでに、その時の夕暮れは美しかったのである。

「……」

進矢は美しい夕焼けなどそっちのけで、燃えるような夕焼けに魅入られている裕美を見ていた。

(いまなら……、きっと……)

進矢は覚悟を決めた。裕美の右手にそつと自分の左手を重ねる。

「えっ！」

裕美は進矢の行動に驚き、進矢の方を向く。

「高木ちゃん。俺、一度断られたけど……、やっぱり諦められない！」

進矢は裕美の瞳をじっと見詰める。裕美は目を逸らさずに、真つ直ぐに進矢を見詰め返した。

「俺……」

進矢は裕美の両手を、自分の両手で包むようにしっかりと握った。

「高木ちゃんのこと……」

鼓動の音しか聞こえなくなる。

「……好きだ！」

進矢は瞬き一つせず、裕美の答えを待つ。

「……私も……」

裕美が口を開いた。

そして。

ザザー。

裕美の答えは、波の音にかき消された。

しかし、裕美を真つ直ぐに見詰めたいた進矢は、彼女の口の動きを見逃さなかった。

あのとき、裕美の口は二回だけ動いた。

唇をすばめるような動きと、歯が見えそうな開き方。

「……本当に……」

「……うん」

裕美は静かにうなずいた。

「ありがとう」

沈みかけた太陽は、二人の影を長く伸ばしていた。

告白から数分間。二人はそのままの姿勢で互に見つめ合ってい

た。

「ねえ」

最初に口を開いたのは裕美だった。

「何？」

進矢は何気なく応える。

「どうやって帰る？」

状況は深刻だった。潮は引いた物の、波のうねりは激しさを増していた。

「どうしょ……」

進矢は困り果てた顔で辺りを見回した。

進矢が自分の背後を見たとき、進矢の目には信じがたい光景が広がっていた。

「あ、すげえ」

「どうしたの？」

裕美は進矢と同じ方向を見る。

「うわあ……」

潮が引いたせいだろうか、二人の視界には、陸地までつながる岩の道が出来ていたのである。

「これで帰れる」

進矢はそう言って、勢いよく始めの一步を踏みだした。

「ははっ、これで帰れる。さ、高木ちゃん！」

進矢はそういって、『おいで』と言わんばかりに裕美に右手を差し出す。

裕美は顔をほころばせて言った。

「『裕美』でいいよ」

裕美はそう言って、進矢の右手と自分の右手を重ねる。

「じゃ、俺の事も『進矢』で」

進矢は軽い笑みを浮かべていった。

「うん。ヨロシクね、進矢」

二人はそう言って、夕暮れの岩道を渡り、皆の居るビーチへと帰

り  
始  
め  
た。

## 第九話 A fiery sunset (後書き)

この回の為にアイデアを下さった方々、有り難う御座いました！  
――）



第十話 雨は夜更け過ぎに…（前書き）

忘れな—いで この小説は あくまでもコメディ—です  
忘れな—いで このお話は 笑いながら読んでね  
（某サラ金業者のCMソングのノリで）

## 第十話 雨は夜更け過ぎに…

二人はゆっくりと岩を渡り、悠々と風画達のいるビーチへと帰ってきた。

帰ってきたとき、二人は手を繋いでいた。風画達はそんな二人を見て、精一杯の祝福と冷やかしをした。

「裕美。良かったね」

美奈は裕美の手を両手で握り、涙目で祝福した。

「ありがとう。全部美奈のおかげだよ」

祝福ムード満点の女性陣に背を向けるようにして、風画は進矢をあれこれと拷問じみた尋問をしていた。

「言え！ 高木ちゃんと何があつた！ いや、高木ちゃんと何をした！」

風画は進矢の首をスリーパー・ホールドで締め付ける。

「……いや、……何も……ない」

氣道を圧迫され呼吸すらままならない進矢。

「ウソをつくな！ 二人つきりになつたんだらう！？ 何も無い訳があるかい！」

お次はコブラツイスト。

「痛い！ 痛い！ だから、何もないってえ！」

激痛に身悶えする進矢に、風画が追い打ちをかける。

「口の固い野郎だ！ じゃあ、これならどうだあ！」

風画は右脇で進矢の頭を抱え、進矢の右わきの下に頭を入れる。

そして、左腕で進矢の右足をホールドし、そのまま後方へブリッジしながら投げつけ、そのままフォールした。

それを見ていた槍牙は小さく呟く。

「おお、あれは藤波辰爾の『フィッシャーマンズスープレックスホールド』。まさか、こんな身近に使い手が居たとは……」

風画に大技を喰らった進矢は、泡を吹いて悶絶する。

「 Weiner。藤波たつゝみいゝゝ！！」

風画は仁王立ちで両腕を高々と掲げ、風画自ら Weiner コールをした。

夕暮れのビーチで一際やかましい一団。

そんな一団に近付く影があった。

「あー」

声の主は海の家バイトの従業員だった。

バイトの従業員は、泡を吹いて倒れている進矢に詰め寄りこう言った。

「沈んだボートは弁償して下さい。これが請求書です」

バイトの従業員は辛うじて意識を取り戻した進矢に、何やら紙切れを手渡した。

「えーと、なにに。『右の金額を請求致します。 ゴムボート代金 参八〇〇円 海の家 マドラス』……」

進矢は言葉を失い、再び気を失った。

帰りの電車の中で進矢は嘆いた。

「ちくしょー。今日は散々な日だ……」

浜辺で風画に投げられた挙げ句、沈んだボートの代金の支払いのせいで財布まで痛手を負ってしまったからだ。ちなみに、そのとき手持ちが足りなかった進矢は、風画達に借金をし、それでも足りなかったため、明日から一週間、海の家で働く事になったのである。

「あーあ、明日から一週間タダ働きかあー」

進矢は大きなため息をつき、窓の外を見た。台風の影響だろうか、空はどす黒い雲に覆い尽くされている。

「まあ、でも。裕美と付き合えるわけになった事だし、プラマイゼロだな」

進矢にとって裕美と付き合うということは、それほどまでに大きなことなのである。

帰りのサラリーマンやフリーターや学生でこった返す車内で、進

矢は一人感慨深げに呟いていた。

「くあゝゝ。帰ってきたあゝゝ!!」

風画が降りた駅のホームで、伸びとあくびを同時に放ち、かなり大袈裟な声を出す。

「ふあゝゝ。今日はいつもの数倍疲れた。な、進矢」

風画は進矢の肩を叩いた。進矢は風画の方を向き、適当な相槌を打つ。

「じゃ、明日からの一週間タダ働き頑張ってねえん」

風画は「疲れた」と言っておきながら、進矢を冷やかす気力と体力と遊び心は残っていた様だった。

「はあゝゝあ。だりいなあゝゝ」

進矢は深く重苦しいため息を放った。

「顧問には私から断っておこう。理由は『親族の葬儀』ということにするから、口裏合わせを忘れるな」

槍牙はサングラスをかけ直しながら言う。

「ああ。宜しく頼む……」

進矢は力無く答えた。

一行は階段を下り改札を抜け、切符売り場の前まで来た。

「さて、じゃあ解散にする？ もう遅いし」

風画は駅の時計を見た。時刻は既に八時を回っていた。

「そうだね。そうしよ」

美奈が言った。

「じゃあ、解さーん」

風画がそう言うのと、各々が家路に就き始めた。といっても、全員が同じ方向に住んでいるため、実質的には六人でぞろぞろ歩き始めたといった感じである。

一行が駅舎の外に出たとき、暗雲から低く重い音が聞こえ、雲の隙間から青白い光が漏れた。

「ねえ、風画くん。雨降りそうだよ」

「そつだな。よし、急ごう」

風画がそう言った直後、強烈な雷鳴が轟き、一瞬の閃光の後に激しい雨が降り始めた。

「やべえ。急げ！」

風画はそう言って走り出す。残りのメンバーは風画に急かされるようにして、一斉に走り出した。

第十話 雨は夜更け過ぎに…（後書き）

ぐずぐず感漂う結果となりました。もう平謝りです m——（ m

## 第十一話 唄と夜（前書き）

久々にキャラ紹介します

レックス：風画の家の飼い犬。シベリアンハスキーのオス。仔犬のときに捨てられていた所を風画に拾われ、今に至る。忠実な成犬。

## 第十一話 唄と夜

風画達が帰りの電車に乗っている頃、風画の家を一人の男が訪れていた。

「うあゝゝ。帰ってきたあ！！」

その男、風画の実の兄である彼、白狼海雅は荷物をほつぽり出して、一際大きな伸びとあくびをした。所詮兄弟である、血は争えない。

海雅はまず、家の庭にある犬小屋へと向かった。彼が犬小屋に近付くと、そこから大きなハスキー犬が現れた。

「くうゝん」

ハスキー犬は喉を鳴らして海雅に近付く。

「おお、よしよし。久しぶりだなあ、レックス」

海雅はそう言つてハスキー犬のレックスの頭を撫でる。

「さて、そろそろ家の中に入るとするか」

海雅は放り出した荷物を拾い集め、家の玄関へと向かった。

「おお、懐かしき我が家よ」

海雅は大袈裟な身振り手振りでドアノブに手をかけつ。

がちつ。金属が噛み合うのを拒否。

「ありや。風画は留守か？」

海雅はもう一度ドアノブを回す。

がちつ。前と同じ反応。

「ちつ。こんな時に外出中かよ」

海雅は悪態をついてドアを蹴った。

「はっはーん。さては唯一無二の兄を迎えるため、色々と歓迎の準備に買い出しに行つてゐるんだな。ああ、可愛い弟だ」

海雅は目を瞑って歓心にひたる。

「うんうん、では、その可愛い弟の帰りを待つとしますか」

「くうゝん？」



海雅はその場にどっかりと座り込み、レックスの体を撫でながら言った。

突然の雨に降られた風画一行は、近くにあったカラオケボックスのひさしの下で雨宿りしていた。

「どうする？ この雨じゃ帰れないよ」

美奈がそう言うと、雨が激しさを増す。台風の影響により、正に土砂降りとも言える振り方である。

「しょうがねえ。カラオケでもすっか」

風画はそういって、店内に入ろうとした。すると、進矢が風画を止めた。

「おい！ ちょっと待て！ 俺はもう金が無いんだよ！」

進矢に呼び止められた風画は、冷たい視線で返した。

「じゃあ、別に無理しなくてもいいんだよ。お疲れさま」

あまりに素っ気ない態度に、進矢は愕然とする。

「ふ、風画……」

「なーんてな、ウソウソ、冗談。お前の分は俺が払ってヤルよ。じゃあ、俺、金下ろして来るから」

風画はそういって、雨に濡れつつ向かいのコンビニへと向かった。

「……。槍牙は大丈夫なの？」

進矢は槍牙に訊いた。

「ああ、問題ない」

槍牙は雨で濡れたサングラスを拭きながら言う。

「ところで、他の皆は平気か」

槍牙はサングラスをかけ、女性陣の方を見た。

「うん、さっき親に電話したら『いいよ』って。この雨だもんね……」

美奈は外を見た。激しい雨により、車道は既に水で満ちていた。

「私も平気だよ。昨日からウチのお父さん、茨城に出張してるから」  
沙輝の父親は警視庁に勤めており、かなり厳しい。

「そう。裕美は？」

進矢は裕美の方を見た。裕美は電話をしたまま槍牙の方を向き、しばらくしてOKサインを作って見せた。

そのおり、風画が戻ってきた。

「ただいま。金下ろしてきたよ」

風画は全身びしょぬれになりつつも、笑顔を作ってみせる。

「あ、そうだ。みんな平気だった？」

風画が全員に訊いた。すると、あちこちから『大丈夫』や『平気』といった声が聞こえた。

「じゃあ、行くか。今日は進矢の恋愛成就記念だからよ、朝までコースだ！」

風画はそういつて、カウンターへと向かう。

そそくさと手続きを済ませると、店員からリモコンとマイクの入った籠を受け取り、皆の元へ戻ってきた。

「さあ、行こうか！ 三階の三 五号室だつてさ」

風画がそう言うのと、彼に従うようにして皆が階段を登る。

部屋へ向かう途中、風画は足を止めた。

「どうしたの？」

美奈が風画に訊いた。

「うーん、大事な事を忘れてる気がする……」

風画は黙って考え込む。

「大丈夫なの？」

美奈が風画を気遣い、風画に近寄る。

「うーん。ま、大丈夫だな。行こう」

風画は気を取り直して、部屋へと向かった。

海雅は玄関に座り込んだまま、風画の帰りを待っていた。

「遅いなあ。どこまで買い物に行ってたんだ？」

海雅が何気なく空を見上げたとき、激しい雨が降ってきた。

「によっ！ 降り出したか？」

海雅はいきなりの雨に驚き、奇妙な声を出す。

「……早く帰って来ーい……」

海雅は暗い夜空を見上げた。

カラオケボックスの一室は、異様な熱気に包まれていた。

『青空 海 どう？このロケーション』

風画はアレンジレンジを熱唱する。

『ロコローション！』

一曲をソロで歌い上げた風画は、何とも満足げだった。

風画がマイクを置いた直後、画面には点数が表示された。

「はははは。七八点だってよ！」

進矢は風画の点数を見て精一杯冷やかす。

「何おう！ じゃあ、今度はお前、これ歌え！」

風画はやけを起こし、適当な曲コードをリモコンに入力し送信する。

直後、画面に歌のタイトルとアーティスト名が表示される。

「『長渕剛 豚』……。なんだこりゃ？」

進矢が首を傾げてる隙に、風画は進矢の手にマイクを忍ばせた。

「はい、では飯島進矢で『長渕剛 豚』 張り切ってどうぞ！」

風画はホスト口調で言った。

『イエー！』

美奈達が歓声を上げる。

「おい！ ちよつと待て！ こんなアグデイツシブなタイトルの歌なんか歌えるか！」

進矢は猛抗議したが、その場の空気はそれを許さなかった。

「ほれほれ、歌え！」

完全に悪人顔の風画。無慈悲にも流れ始める、曲のイントロ。

「チクシヨウ……。いや、普通に歌えねえから」

夜はまだまだ長かった。

## 第十一話 唄と夜（後書き）

大変申し訳御座いません、  
平に平に、これから先、マジです

## 最終話 唄と共に（前書き）

最高のぐだぐだ感とずるずるべったりを貴方に送ります。

## 最終話 唄と共に

「ひゃっひゃっひゃっ！ たったの三点だってよ！！ ぎやははははは！」

風画は進矢の点数を見て馬鹿笑いする。

「だってさ、いくら長渕の曲でも『豚』はないだろう」

画面には『只今の得点 三点』とでかでかと表示されていた。

「それでも三点はないだろう。おつ、次は槍牙か！？」

槍牙はリモコン片手に曲本をめくっていた。

「何歌うの？」

沙輝が槍牙に訊いた。

「井上陽水でも歌おうと思っているのだがな。……。あつた」

「はははははは。渋い！ 流石、槍牙！！ カッコいい！！ それで良い！！」

風画が手を叩いて喜んでいる内に、曲の前奏が始まった。

『都会では 自殺する 若者が 増えている』

かなり渋く重く深みのある声。井上陽水とは程遠かったが、それなりに上手かった。

『行かなあーくちや 君に会いに行かなくちや 君の元へ行かなくちや 雨に濡れ』

槍牙の唄がサビに入ったとき、海雅は玄関前でぶつぶつ言っていた。

「遅いなあ。どこで雨宿りしてんだ？」

『つーめたあーい雨が 僕のこおーころおーにしみる 君のこおーといーがーは かんがえーられーなくなる これは いいーことだおろおー』

槍牙が一番を歌い終えたとき、風画には何か引つかかる物があった。

「うーっむ、なにか忘れてんな。何だっけ？」

風画が頭を抱えて悩み、必死に思い出そうとする。

そうしてる間に、次の曲が始まった。今度は美奈と沙輝のデュエツトだった。

「あゝなあゝたにいゝ あゝいあたあゝくてえゝ あゝいたあゝくてえゝ 眠れぬよおゝるゝは あゝなあゝたのゝ ぬゝくもゝりをゝ そのぬゝくもゝりをゝ 思い出しゝ そおつと瞳とじてみゝるゝゝ」

二人ともそれなりの美声という事もあり、その歌声は鳥肌物だった。

「いええー！ すげえ、マジ感動した！ 上手い！」

風画は二人の唄を絶賛する。

一方、その頃。

「風画あゝゝ、まだかよゝゝ。へつきし！」

海雅は豪雨に打たれて風邪をひいてしまった。

「今何時だ？ うわゝ、もう十二時だ。へつくしよい！」

海雅は左腕の腕時計を覗き込み、大きなくしゃみをした。

「風画あゝゝ」

「くゝゝん？」

海雅の度重なる情けない声に、寝入ってたレックスが起き出す。

「ああ、レックス。ごめんね、おこしちゃったな。ん！？」

海雅がレックスの背をお詫び代わりに撫でたとき、海雅の頭上の豆電球が光った。

「レックス、ちょっとごめん」

海雅はそういつてレックスに抱きつく。

「うわゝゝ、この子暖かい。しばらくこうさせて」

「くゝゝん」

海雅はレックスに抱きついたまま、眼を閉じた。一方、レックスは眠い状態でいきなり抱きつかれた為か、明確な抵抗もできずにいた。

カラオケのテンションは最高潮に達した。

「次。飯島進矢。平井堅で『瞳を閉じて』歌います！」

進矢はマイク越しに、高々と歌います宣言。

「うおーい！ やれやれ！」

はやし立てる風画。

『あーさめーさめーるたーびにいー きみのぬうーけがーらがあー  
そーばーにーいーるー』

興奮した進矢はどんどん歌い進め、遂にサビの部分に達した。

『your love forever』

案の定、無理に高くした酷い有様。しかし、それが逆に場の空気を盛り上げる。

『ひいーとみーをとーじてー きーみをーえがーくよー それだけでーいーいー』

進矢は気持ちよく歌い続け、無理に高くした状態でフルコーラス歌いきった。

「得点は！」

進矢が画面を見る。

『三二点』

今日の進矢の唄は、散々な結果に終わった。

「風画ー」

海雅はレックスを抱いたまま寝入りそうになるのを必死に堪えていた。しかし、健闘の甲斐なく、瞼は重力に従い下垂し始める。

（ああ、風画が見える……）

レックスは海雅の腕の中で寝入っていた。

（風画、もうこれだけだ……）

海雅はあまりの眠気と寒さに、考えることすら支離滅裂になる。

（はあ、風画……）

海雅はレックスを抱いたまま、玄関先で寝入った。



カラオケが終わったのは午前五時過ぎだった。

「くあゝゝ。疲れたゝゝ」

カラオケ屋の店先で、一際大きな伸びとあくび。伸びとあくびのすさまじさが、風画の疲れの度合いを示していた。

雨は既にながたており、風もとうに止んでいた。

「じゃあ、これで本当にさよならしよう。みんな、昨日今日と本当にお疲れさま」

風画はそういつて家路についた。他のメンバーも疲れ切った表情で家路についた。

風画が家に帰り着くと、玄関先に見覚えのある男がいた。  
「誰だあれ？」

風画は不審に思いつつも、重い足を引きずる。彼が男を押しつけ、ドアの鍵を開けようとしたとき、風画は男に足を掴まれた。

「……よあ、風画あゝ。ずいぶんと遅いお帰りだな……？」

風画の足を掴んだ男、白狼海雅は異様なオーラを放っていた。

「あ、兄貴。帰ったんだ」

「へへへへ、正確には帰りかけただ。今まで何してた？」

海雅は風画を睨み付ける。

「いやあ、昨日から海行つてて、その帰りにオールでカラオケ」

「ほお？ ずいぶんとめぐまれてますなあ。実の兄をこんなにしやがつて」

海雅はそういつて立ち上がると、風画の右手を自分のおでこにあてた。

「熱っ。どうした？」

「どうしたもこうしたもねえ！ ぜんぶてめえのせいだ！」

「のわつ。兄貴落ち着け。体に響く！」

「うるせええええ！」

その後、数十分に渡る壮絶な格闘の末、敗者風画という形で決着

がついた。

その日の部活。

槍牙は顧問の先生に、欠席した者の理由を話すのに難儀した。

「ですから、進矢は親族の葬儀。風画は……、親族の結婚式です」

その日の正午、槍牙の携帯に一通のメールが届いた。

『白狼風画。本日の部活は出席不可。言い訳は君の裁量に委ねる』と。

そのメールを送った人物が海雅であることは言うまでもない。

## 最終話 唄と共に（後書き）

長くてくどくてぐだぐだですみません>m(\_\_\_\_\_)m<  
携帯の人は非常に疲れたと思います。

本当に申し訳御座いません。これも全て、作者の未熟さ故です。  
本当に申し訳御座いません>m(\_\_\_\_\_)m< (平に〜平に〜)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2201a/>

---

ひと夏の恋（笑いアリ）

2010年10月8日15時29分発行